

宋代淨土教の一斷面

——永明延壽について——

柴 田 泰

宋代淨土教は一般に他宗との混合・融合の形に於いて展開したと云われているが、それ等は大別して、(一)知禮・遵式・智圓・宗曉等の天台系淨土教家、(二)元照・戒度等の律系淨土教家、(三)延壽・義懷・宗隲・清了等の禪系淨土教家の三系統に分けられる。本稿ではこの中の特に禪系淨土教家の系統について、その代表的禪師永明延壽(九〇四—九七五)の著作と史傳を通して、淨土教思想がどのような形に於いて禪の思想と融合されるにいたつたかと云う問題を考察しようと思う。

禪家によつて淨土教思想が取入れられた初めは諸家念佛集に南陽慧忠が「宗說皆通解行兼脩師明垂言教」深勤往生爲之宗門念佛首倡也」とあり、更に百丈懷海が「其立法祈禱病僧化送達僧皆唱彌陀悉歸淨土」とあることにより、恐らく彼等が禪淨融合を説いた最初の人達と目されるが、その具體的な内容は審びらかでは無く、資料の信憑性も薄い。その後、念佛禪の提唱者が存在していた事は考えられている

が、著作史傳を通して明確に跡づけられる最初の人、永明延壽であろう。

智覺禪師永明延壽についての史傳は、智覺禪師自行錄・宋高僧傳・龍舒淨土文・樂邦文類・佛祖統紀・佛祖通載・廬山蓮宗寶鑑・淨土聖賢錄等に伝えられ、著書としては宗鏡錄百卷・萬善同歸集三卷・神棲安養賦一卷・唯心訣一卷・その他つづさには智覺禪常自行錄に六十一部が記されている。この中で、宗鏡錄は「集大乘經論六十部兩土聖賢三百家之言證成唯心之旨」と云われるものであり、萬善同歸集は、禪と淨土との融合を圖り、いわゆる禪淨融合或いは教禪一致の思想を發展せしめ、後の淨土教家に屢々依用されるにいたつたもので、いずれも著名であるが、此處では、特に萬善同歸集を中心として彼の根本思想、及びその淨土教思想との關連性、更に諸史傳に記される事蹟を參看して、禪家に於ける淨土教の内容と位置づけを検討することにした。

永明延壽の根本思想は、從來、諸先師も指摘している様に「今略言_レ之。總名_二萬善同歸_一別開_二十義_一。一名_二理事無閼_一二名_二權實雙行_一三名_二諦並陳_一四名_二性相融即_一五名_二體用自在_一六名_二空有相成_一七名_二正助兼脩_一八名_二同異一際_一九名_二修性不二_一十名_二因果無差_一」(一一二)に盡さる。即ち「理事無閼」とは序並に第一一三項の言葉を以つてすれば「幽旨難明」であるけれども「非一非異」と言われるものであり「性質之理相虛之事」は差別無く「事因_レ理立不_二穩_一理而成_二事_一。理因_レ事彰不_二壞_一事而顯_二理_一」「若離_レ事而推_二理墮_一聲聞之愚。若離_レ理而行_二事同_一凡夫之執」であり、理と事とは「水波の關係」の如きものである。従つて萬善同歸の由來も初頭に「夫衆善所_レ歸皆宗_二實相_一。如_二空包納_一似_二地發生_一。是似但契_二一如_一自含_二衆德_一……萬行常與不_レ壞_二緣生_一法界恒現……應_二須廣行_一諸度」と述べる如く、萬行がすべて萬法であり、いたすらに理に執し、事に迷い、空坐せることなく、萬善を修すべきことを意圖したものである。それ故、理に執し事に迷う聲聞・凡夫に對し、菩薩は「以_二無所得_一而爲_二方便_一。涉_二有而不_レ乖_一空。依_二實際_一而起_二化門_一。履_二眞而不_レ闕_二俗_一……一切施爲無_レ非佛事」であり、「夫萬善は菩薩入聖之資糧」「萬善悉向_二菩提_一」「二」を強調する。尙、序に於いて理を推すを聲聞・事を行ずるを凡夫・理事兼修を菩薩と自から求道者の態度に差別が見られる。それでは一切の萬善を起さしむる因

は何であるかが問題となるが、彼はそれを「一心具足萬行」「我若欲_レ見_二安樂世界阿彌陀佛_一。隨_二意即見_一。乃至十方諸佛皆由_二自心_一……如_レ是一切悉由_二自心_一」「心該_二萬法_一……菩薩萬行佛果體用亦不_レ離_二心_一」「序」と諸經論を引用し「心」にしている。

しからば、かくの如き思想を根底とせる延壽の淨土教觀はどのようなものであつたろうか。まず第一に指摘されることは、理事無閼或いは理事双修の思想から導びかれる淨土教觀である。一體、萬善同歸集が著わされたのは「如今多重_二非心非佛_一非理非事泯絕之言_一以爲_二玄妙_一」不_レ知但是遮詮治病之文。執_二此方便_一認爲_二標的_一。却不_レ信_二表詮直指之教_一」「二」の愚を諫めるためであり、従つて問の形は殆んどすべて「何故に萬善を強調するか」との論難で示されている。しかし彼の眼目とした所は「慈愍三藏云 聖教所說正禪定者。制_二心一處_一念念相續離_二於昏掉_一平等持_二心_一。若睡眠覆障即須_二策勵_一念佛誦經禮拜行道講經說法教化衆生萬行無_レ廢所修行業廻向往_二生西方淨土_一（等を引用して）……是以或因_二念佛_一而證_二三昧_一。或從_二坐禪_一而發_二慧門_一。或專誦經而見_二法身_一。或但行道而入_二聖境_一」「一六」であつたから、萬善に含まれる念佛は、理事・眞俗・正助等に規定する場合には事相・俗諦・助行とされるにしても、彼の根本主張がそれらの無閼・並陳・兼修にあることより見れば、二元論的立場に立つ念佛ではあり得な

い。それは、いわゆる「目と足」「水と波」「序」との關係にある念佛であり、禪と淨土との融合と云うよりは、理と事との融合即ち萬善すべての兼修が眼目であり、淨土教的立場のみを提示する比重は決して大きいとは云えない。第二に指摘されることは「唯心」より導かれる淨土教觀である。

これについては「問唯心淨土周遍十方。何得託質蓮臺寄形安養……」「二八」と云う指方立相の解釋が注目せられる。この項は樂邦文類四を始め諸先師によつて依用解釋されているが、彼の淨土觀は「唯心萬法」の立場からの唯心淨土であり「識心方生唯心淨土」「心外無法」であるが「力量未充觀淺心淨境強習重。須生佛國以仗勝緣忍力易成速行菩薩道」と諸經論を引き指方立相の立場をも攝め取つている。即ち、二諦並陳の立場より唯心淨土を主張しつつ指方立相の淨土觀を否定していない。従つて、念佛往生についても、唯心念佛・無生往生を根底としながらも、理事無關の立場より高聲念佛・行道念佛を認め西方淨土往生を勤めると云うパラドックシカルな表現をとつている。第一三・三一項並に樂邦文類等にも引用されている第二九・三二項によると、「佛號を唱えることは聲に一切法が包羅されている」として諸經論を引き、念佛稱佛の威力、特に高聲念佛の功德を述べ「二三」順水に帆を張るの譬えで坐念佛より行道念佛を強調し「二二」「臨終十念の威力」を説く「二九」。念佛の内容に

つては「念佛は唯心念佛であり、唯心の所作として見即無見であり、所念に隨つて佛に非ずと云う事無し」「三〇」と淨土に對する場合と同様の主旨を説き、往生を勤め淨土の利益を擧げる。更に禪定と往生については、これを觀經九品に當てはめて、定心・專心の差別をなし「自有昇降。上下該攝不出生二心。一定心如修定習觀上品往生。二專心但念名號一衆善資熏廻向發願得成末品」「三三」と説く。このように、彼の淨土教觀は、根本的には唯心淨土への唯心念佛による無生往生と示され得るが、それは單に理性のみに滯つているのではなく、事相を離れず、實踐的には西方淨土への行道・高聲念佛による往生を説き、更に禪定を上品・念佛を末品と見做していたことが知られる。

以上によつて延壽の根本思想とその淨土教觀はほぼ明らかにされたと思うが、禪家においては不立文字・教外別傳が標示され、行住坐臥にその思想が表れねばならないゆえ、諸史傳に照らして以上の點を検討して見ることにしよう。先ず彼は理事双修・萬善勤勵の根本的主張をなすから、當然その日常生活は高聲・行道念佛を含めた萬善を行ずることによらねばならぬ。この點について諸史傳は共通して「於是每日誦經禮念佛說戒施食放生。日行利益事一百八件。未嘗暫怠」と傳えている。この百八事については、智覺禪師自行錄に詳しい記述があるが、誦經行道・禮佛念佛・受持陀羅尼と諸宗

の作法すべてに涉り、誦經では法華・華嚴・陀羅尼・般若經、禮佛念佛では十方佛・釋迦牟尼佛・阿彌陀佛・諸菩薩がその對象となつてゐる。淨土教關係では念（禮）阿彌陀佛が七事に記されるが、誦經の對象となる淨土經典が一つもない事、禪定關係の作法の少ない事は注意してよい。次に理事双修の理としての禪・事としての淨土を考へる場合、淨土聖賢錄三・諸家念佛集四によると「四料簡」が作されたという。即ち「有禪無淨土十人九錯路境若現前暫爾隨他去。無禪有淨土萬修萬善去但得見彌陀何愁不開悟。有禪有淨土猶如帶角虎現世爲人師當來作佛祖。無禪無淨土鐵牀並銅柱萬劫興千生設箇人依怙」とあり、有禪有淨土を最上としているが、有禪と有淨土を比較した場合には無禪有淨土を強調する。しかしながら、この史傳書が比較の後に淨土教家が選集したものであり、禪家として修定を上品・念佛を末品としている點から考へても、彼の眼目は萬善勤勵であり、前述の第一六項や「機病不レ同法藥有レ異……或有レ聞レ法悟者。或有レ坐禪悟者。或有レ念レ經得レ度。或有レ受戒證レ眞。」（受菩薩戒法）とある點からすると、明確に理としての禪・事としての淨土と云う區別、更に有禪無淨土と云う表現を使つたとするのは、彼の根本思想から見て矛盾している如く思われる。また、行道念佛を主張せる態度については、すべての史傳に「日暮往別峯行道念佛。旁人聞螺貝天樂之聲。忠懿王歎曰自古求西方者未レ有」

如此之專切一也」と記される如く「九旬習定有鳥巢於衣械」ほどの強い意志で實踐生活を行なつていたことが判明する。それでは、何が原因で行道念佛を主張し、實踐したかが問題となるが、諸史傳の多くが「宿願未だ決しないとき二圖を作す一曰一心禪定二曰誦經萬善莊嚴淨土 七度拈じて誦經萬善莊嚴淨土の圖を得る」と記し、蓮宗寶鑑四に「智度論を見て念佛を以て衆生を誘化すべきと惟う」とあることよりして、恐らく當時の理に執し事をおろそかにする禪家を戒めたためだけではなく、彼自身の問題として禪定のみにある程度の限界を認めたことに由來している如くに思われる。しかしながら、このように實踐面において萬善行道に努めた延壽にとつて、その所依の淨土經典は具體的に何であつたかという点、實は明らかではない。萬善同歸集には觀經・般舟三昧經・稱讚淨土經の引用があるけれど他經典に比して少ないし、一百八事の行道をなしたことは諸史傳に明示されてはいても、誦經の對象として法華・華嚴・陀羅尼經が屢々擧げられるのに對して、淨土經典と考へられるものが何もないことは對蹠的な特徴といふべきである。

以上の如く、永明延壽は、當代の傑出せる禪者として、理事無關の思想を根底に各宗各教を萬善として勤勵・實踐し、淨土教思想については有無之無・理事無關としてしか示されない境地に於いて、念而無念の念佛・西方淨土にして唯心淨

土と云う把握をしていた。延壽以前の禪家が念佛禪という小さな枠内で實踐したのに對して、彼は淨土教を一つの立場として認めた點において、また彼以後、彼の影響を受けて禪淨融合思想が雲棲寺株宏等によつて大きな展開をなした點において、延壽の果した功績は大きい。しかし、後世淨土教家が説くように、延壽は禪と淨土を理と事に對應し、或いは有禪無淨土と云つた差別を考えていたと見るよりは、持戒・誦經等の行道實踐を重視したのであり、念佛を萬善の中の一つとして考え、それも決して大きな比重を持たせていたわけではなかつた。故に彼の立場はあくまでも聖道門的というべきであり、純粹淨土教家が念佛を易行門として專修したのとは異質の性格を帶びていたといわねばならぬであらう。

- 1 淨全一五・六五八b。
- 2 勅修百丈清規にも記されている。
- 3 續藏二・一六・一
- 4 佛祖統紀卷二六 大正四九・二六四c。
- 5 萬善同歸集（大正四八）は百十四の問答で形成されており、その出所を明らかにする爲、以下項の番號を擧げる。
- 6 續藏二・一〇・一・一一a。
- 7 此の思想は少し後の禪家長蘆宗嶺にも云えることである。
〔樂邦文類第二（大正四七・一七七b）、龍舒淨土文第十一（大正四七・二八四a）〕

新刊紹介（七）

〔漢譯
對照〕梵和大辭典

監修・辻直四郎／編纂主任・大類純

故荻原雲來博士の手によつて戰前（一九四〇—四三）に第六分冊まで刊行され、戰亂などのため長く中絶していたが、今度第七分冊以後が鈴木學術財團から續刊。

（新刊）第七卷・第八卷 各一、五〇〇圓／戰前既刊の複刻版 六冊 一組 七、八〇〇圓

鈴木學術財團

山邊習學「人生修行の旅—華嚴經の世界—」

（パドマ叢書）

A5 上下二卷 各三九〇頁
鈴木學術財團刊 定價二、二〇〇圓